

建築学生ワークショップ醍醐寺2024

architectural workshop DAIGOJI

参加学生募集!

応募締切

5.17
Call for entry

開山より 1150 年 — 醍醐寺

古都京都の文化財としてユネスコの「世界遺産」に登録されている聖地に於いて

「開山より 1150 年」
2024 年 醍醐寺 開催

醍醐寺について

平安時代の初期となる 874 年に、弘法大師（空海）の孫弟子にあたる理源大師聖宝が准胝観音ならびに如意輪観音を笠取山頂上に迎えて開山され、山深い醍醐山頂上一帯を「上醍醐」、山裾を「下醍醐」と称され、密教寺院として法流の中心を担うと共に、多くの修験者の霊場としても発展してきました。200 万坪におよぶ広大な境内地にそびえる国宝五重塔は、1,100 年以上の時の流れを現代に語り伝えています。その他にも醍醐寺には、国宝 6 棟、重要文化財 10 棟を含む 92 棟の建造物の文化財を管理されています。さらに総床面積 1 千坪の霊宝館には、仏像、仏画を含む約 15 万点の寺宝を所蔵しておられます。また豊臣秀吉による「醍醐の花見」が行われた地としても知られ、近年では 1994 年に古都京都の文化財としてユネスコの「世界文化遺産」に登録されました。

開催

本開催は、公募した参加学生たちを 5 月 24 日（金）に選定し、10 の班に分かれて、6 月 8 日（土）に全国から京都に集まり、現地調査を開始します。境内では、開催テーマとしての位置づけにもあるこの場所が持つ特有の力や意味を身体で感じ、その中から各々の班で発想の原点を見出ししていきます。さらに周辺地域の街歩きを繰り返し、いま現代に生き、地方で学んでいることへの意味をみずから問うていきます。

7 月 13 日（土）の提案作品講評会では、国内外にて活躍をされる建築家の先生方を中心とした講評者の指導のもと、日本における貴重で特殊な環境における場所性に根づいた実作品をつくりあげる意味を問い正され、翌日、7 月 14 日（日）の実施制作の打合せでは、地元の建築士や施工者、大工や技師、職人の方々に伝統的な工法を伝えていただく機会を得ながら、日本を代表する組織設計事務所の方々や多くのゼネコンに所属される技術者の皆様による実技指導をいただきます。

9 月 1 日（日）、この参加学生たちが制作した小さな建築を 10 体、醍醐寺境内に実現します。当日は、これらのプロセスを経て創出した建築空間を 1 日だけ、どなたでも体験していただけます。そして、建築・美術両分野を代表する評論家をはじめ、第一線で活躍をされている建築家や美術家の方々、世界の建築構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評者にお集まりいただき、公開プレゼンテーションを開催いたします。

学び

開催には、府内をはじめとした京都周辺の多くの方たちや、これまでの開催地の関係者の皆さま、そして全国から集まる建築に関わる関係者や一般参加者に向けた発表を行います。建築のプロセスに胸を躍らせる 3 ヶ月。参加学生たちがさまざまな歴史をもつ古都の伝統を学び、この文化に位置づけた解釈を生み、醍醐寺に存在し続ける建築様式に連なり、訪れた人たちの心を落ち着かせ、祈りを捧げるような空間体験と提案の発表に、どうぞご期待ください。



観音堂



三宝院大玄閣



清瀧宮本殿 下醍醐



醍醐水外観



不動堂



三宝院庭園



唐門

Architectural Workshop DAIGOJI 2024

開催場所 醍醐寺境内（京都府）

醍醐寺は、874年に、弘法大師（空海）の孫弟子にあたる理源大師聖宝が准胝観音ならびに如意輪観音を笠取山頂上に迎えて開山され、山深い醍醐山頂上一帯を「上醍醐」、山裾を「下醍醐」と称され、多くの修験者の霊場として発展してきた寺院です。



現地滞在スケジュール

6月08日(土)
現地説明会・調査(日帰り)

7月13日(土)
提案作品講評会(1泊2日)

14日(日)
実施制作打ち合わせ(1泊2日)

9月10日(火) - 16日(月)
合宿にて原寸制作(6泊7日)

9月15日(日)
公開プレゼンテーション

※参加申込の際に、全日程の予定を確保してからお申込みください。

6月29日(土)午後
各班エスキース(東京・大阪会場)

開催期間 2024年9月10日(火) - 16日(月) 6泊7日

※合宿にて原寸制作
※9月15日(日) 霊宝館にて公開プレゼンテーション

参加費用 実費 (宿泊費、保険代、資料費等 ¥50,000 事前徴収制)

※現地までの交通費・食費は各自別途負担となります。
※開催地の有志の方々のご協力と、学生の参加費により運営をしています。

参加申込

ウェブサイトからお申込みください

※参加者募集期間 2023年9月18日(月)~2024年5月17日(金) 23:59(必着)
※参加対象者 建築および都市、環境、デザイン、芸術など、これに類する分野を学ぶ学生および院生【参加学生】定員:60名程度(大学院生10名+参加学部生45名+運営サポーター5名)10グループを予定
ただし、定員を超えた場合は、主催者による選考をおこないます。予めご了承ください。
【運営サポーター】定員:5名程度(参加・宿泊費無料 開催期間中)
開催期間中、合宿期間中の運営サポーターも募集いたします。(学部は問いません)
※交通費・食費 各自・自己負担

<https://ws.aaf.ac>

参加予定講師者

日本の文化を世界へ伝えるの方々を中心として、建築・美術両分野を代表する評論家をはじめ、第一線で活躍をされている建築家や都市計画家、コミュニティデザイナー、構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評。また近畿二府四県の大学で教鞭を執られ、日本を代表されるプロフェッサー・アーキテクトの皆さまにご参加いただけます。

石川 勝 (大阪・関西万博会場運営プロデューサー)	腰原 幹雄 (構造家 東京大学 教授)	平田 晃久 (建築家 京都大学 教授)
中島さち子 (大阪・関西万博テーマ事業プロデューサー)	櫻井 正幸 (旭ビルウォール 代表取締役社長)	平沼 孝啓 (建築家 平沼孝啓建築研究所 主宰)
太田 伸之 (日本ファッションウィーク推進機構 実行委員長)	佐藤 淳 (構造家 東京大学 准教授)	藤本 壮介 (建築家 藤本壮介建築設計事務所 主宰)
前田 浩智 (毎日新聞社 主筆)	陶器 浩一 (構造家 滋賀県立大学 教授)	安井 昇 (建築家 桜設計集団 代表)
建畠 哲 (美術評論家 埼玉県立近代美術館 館長)	芦澤 竜一 (建築家 滋賀県立大学 教授)	安原 幹 (建築家 東京大学 准教授)
南條 史生 (美術評論家 森美術館 特別顧問)	遠藤 秀平 (建築家 遠藤秀平建築研究所 主宰)	山崎 亮 (コミュニティデザイナー 関西学院大学 教授)
稲山 正弘 (構造家 東京大学 教授)	竹原 義二 (建築家 神戸芸術工科大学 客員教授)	横山 俊祐 (建築家 大阪公立大学 客員教授)
倉方 俊輔 (建築史家 大阪公立大学 教授)	長田 直之 (建築家 奈良女子大学 教授)	吉村 靖孝 (建築家 早稲田大学 教授)

建築学生ワークショップとは

建築ワークショップは、建築や環境デザイン等の分野を専攻する大学生を対象にした、普段の大学生活では体験できないスケールで作品制作を行う地域滞在型のワークショップです。国内外にて活躍中の建築家を中心とした講師陣の指導のもと、開催地の歴史や地域環境を研究しながら、他大学生との交流の中でその場所における社会的な実作品をつくりあげる経験を目的としています。

“今、建築の、原初の聖地から”伝えたいことを、空間として表現してください。

2024年、世界から注目されている古都・京都の基点となる醍醐寺境内に、小さな建築空間を実現する建築学生ワークショップを開催します。近現代における主要都市のまちづくりでは最も貴重となる伽藍をはじめとした伝統的な寺院儀礼の宝庫となる貴重な文化財を多く蔵し、世界各地から多くの参詣に訪れるこの地で、共に学んだ空間を発信していきます。学生たちはきっと、その若い感性によって新たな発見をし、日本のナショナルリティを未来へ継ぎ、創造を提案をしてくれることでしょう。

【スケジュール】

- 5月9日(木) 参加説明会開催(東京大学) 吉村靖孝
- 5月16日(木) 参加説明会開催(京都大学) 佐藤淳
- 5月17日(金) 23:59 必着 参加者募集締切
- 6月8日(土) 現地説明会・調査
- 6月29日(土) 各班エスキース(東京会場・大阪会場)
- 7月13日(土)~14日(日) 提案作品講評会と実施制作打合せ
13日(土) 提案作品講評会
14日(日) 実施制作打合せ
- 7月15日(月)~9月9日(月) 各班・提案作品の制作
- 9月10日(火)~16日(月) 合宿にて原寸制作ファイナル
10日(火) 現地集合・資材搬入・制作段取り
15日(日) 公開プレゼンテーション
16日(月) 撤去・清掃・解散



金堂



太閤しだれ桜 三宝院

【制作内容】

“今、建築の、原初の、聖地から” ~古都の未来のために建築ができること
“唯一無二の環境を守るために、あなたの提案を実現化してください”

- ・フォリィ(原寸模型)を地域産材(自然素材:木材、和紙、土、石など)の材料で制作
- ・リユース、リサイクル制作を前提とし、ゴミを出さない手法や構法、利用方法を探る

Architectural Workshop DAIGOJI 2024

開催記念 説明会 講演会

全国の建築学生が合宿にて制作を行う「建築学生ワークショップ」は2024年、9/10(火) - 16(月)に醍醐寺境内にて開催します。このワークショップの参加募集の説明会と開催を記念して、活躍される建築家に自身の学生時代の体験を通して、現在の研究や取り組みにどう影響しているのかをレクチャーいただきます。ワークショップへの参加を予定していない方でも、どうぞお気軽にご参加ください。

東京会場

東京大学 (弥生キャンパス) 農学部 弥生講堂アネックス

東京メトロ南北線「東大前駅」徒歩3分
東京メトロ丸の内線・大江戸線「本郷三丁目駅」徒歩10分

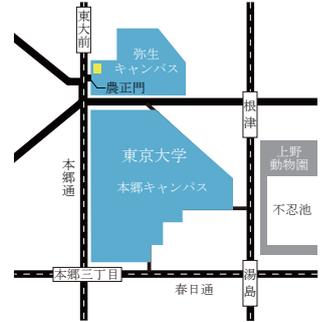
5月9日|木| 17:30 - 19:00 (17:00 開場)

入場無料 | 定員：先着 100名 | 要申込 ※当日のご参加も若干名様まで可能です。
※開催日程・場所は予告なく変更する可能性があります。
ウェブサイトを再度ご確認ください。



基調講演 **吉村靖孝** (建築家)

1972年愛知生まれ。97年早稲田大学大学院修士課程修了。99-01年MVRDV勤務。05年吉村靖孝建築設計事務所設立。現在、早稲田大学教授。主な受賞に吉岡賞(ドリフト)、アジアデザイン賞(Nowhere but Hayama)、JCD デザインアワード大賞(Red Light Yokohama)、日本建築設計学会賞大賞(フクマススペース)など多数を受賞する。



京都会場

京都大学 (吉田キャンパス) 百周年時計台記念館 国際交流ホールIII

京阪本線「出町柳駅」徒歩10分
京都市営バス「京大正門前」または「百万遍」下車 徒歩10分

5月16日|木| 18:30 - 20:00 (18:00 開場)

入場無料 | 定員：先着 100名 | 要申込 ※当日のご参加も若干名様まで可能です。
※開催日程・場所は予告なく変更する可能性があります。
ウェブサイトを再度ご確認ください。



基調講演 **佐藤淳** (構造家)

1970年愛知生まれ。95年東京大学大学院修士課程修了後、木村俊彦構造設計事務所勤務。00年佐藤淳構造設計事務所設立。現在、東京大学准教授。主な作品に、「共愛学園前橋国際大学4号館 KYOAI COMMONS」や「プロソリサーチセンター」、「武蔵野美術大学美術館・図書館」や「地域資源活用総合交流促進施設」など、「ヴェネチアビエンナーレ 2008」。主な著書に「佐藤淳構造設計事務所のアイテム」。建築家との協働で数々の現代建築を新たな設計理念によって実現させてきた。



2010 奈良・平城宮跡



2011 滋賀・竹生島



2015 和歌山・高野山



2016 奈良・明日香村



2017 滋賀・比叡山



2018 三重・伊勢神宮



2019 島根・出雲大社



2020 奈良・東大寺



2021 東京・明治神宮



2022 広島・厳島神社



2023 京都・仁和寺

主催

AAF 知性あふれるレクリエーションを。 Art & Architect Festa
NPO/AAF Art&Architect Festa 特定非営利活動法人アートアンドアーキテクトフェスタ ウェブ www.aaf.ac Eメール info@aaf.ac

醍醐寺

特別協賛

AGB
旭ビルウォール株式会社

木と生きる幸福
住友林業

座談会 | ”開山より1150年”～古都の未来のために建築ができること 建築学生ワークショップ醍醐寺2024

仲田順英(醍醐寺執行統括本部長) × 三好祥徳(醍醐寺執行法務部長)

× 井垣貴子(一般社団法人醍醐寺未来創造機構 理事長)

× 腰原幹雄(構造家 | 東京大学生産技術研究所 教授) × 櫻井正幸(エンジニア | 旭ビルウォール 代表取締役 社長)

× 藤本壮介(建築家 | 藤本壮介建築設計事務所 主宰) × 平沼孝啓(建築家 | 平沼孝啓建築研究所 主宰)



座談会の様子(醍醐寺 三寶院にて)

——— 全国の大学生が参加するこの建築学生ワークショップは、毎年、場所を移しながら開催してきました。歴史と場所の特性をはっきりと持つ開催地で、周辺の生活文化を合わせて調査することにより、建築を保全していく造り方の技に触れ、制作を含めた実学として地域滞在を行い、神聖な場所の静肅な空間からコンテクストを見出し、建築の解き方を探るきっかけを経験していきます。醍醐寺は、平安時代の初期となる874年に、弘法大師(空海)の孫弟子にあたる理源大師聖宝が准胝観音ならびに如意輪観音を笠取山頂上に迎えて開山され、山深い醍醐山頂上一帯を「上醍醐」、山裾を「下醍醐」と称され、密教寺院として法流の中心を担うと共に、多くの修験者の霊場としても発展してきました。200万坪におよぶ広大な境内地にそびえる国宝五重塔は、1,100年以上の時の流れを現代に語り伝えています。その他にも醍醐寺には、国宝6棟、重要文化財10棟を含む92棟の建造物の文化財を管理されています。さらに総床面積1千坪の霊宝館には、仏像、仏画を含む約15万点の寺宝を所蔵しておられます。また豊臣秀吉による「醍醐の花見」が行われた地としても知られ、近年では1994年に古都京都の文化財としてユネスコの「世界文化遺産」に登録され、当時と同じ姿を現代に伝えています。近現代における主要都市のまちづくりに欠かせない最も貴重な「聖地」である清らかな場に身を置き、この伝統的な構法に触れ、この場所の特性を用いるため、大きく分けて「歴史」「場所性(地形)」「現代の問題」の観点から提案に求めます。

本日は開催地として多大なご尽力をくださいます醍醐寺にて、全国の参加学生にむけて導きをくださる、仲田執行、三好執行、井垣様をはじめ、東京大学の腰原先生、毎年サポートをくださいます旭ビルウォールの櫻井社長、来年・関西万博を控えられた会場プロデューサーで建築家の藤本先生、オーガナイザーの役割を担い続けてくださいます、建築家の平沼先生という、当ノンプロフィットで活動を進める両代表にもご参加いただき、開山1150年に合わせた醍醐寺開催についてお伺いいたします。皆さま本日はどうぞよろしくお願いたします。

平沼：この地は京都御所から東南方向にあり、古くから大和、今の奈良にありました、宇治の大嶺から北陸に至る幹線道路上にあったと聞きますが、この地が開山の地に選ばれた理由を教えてください。

仲田：聖宝様は色々な仏教を勉強したいと言う気持ちが強かったんです。奈良の南都六宗と呼ばれる哲学的な要素の強い仏教、いわゆる頭教にも興味をもたれ、三論や法相も勉強したくて東大寺にも行かれています。貞観寺というお寺が今の深草あたり、京都から少し南に外れた場所にあるのですが、「醍醐寺新要録」という醍醐寺の歴史が書いてある文書には、聖宝尊師が上醍醐の上に五色の雲がたなびくを見て山に登ってみると湧水があり、そこにいた老人が飲むように勧められて飲んでみると非常に美味しく、これこそが醍醐味だと感じられ、その老人が実はその氏神様で、ここは神仏が集まる場所だから是非この地をあなたに授けましようという伝説が残っています。ここに真実が隠されていると思っておりまして私の想像では、ここは盆地なので、雲が雨上がり立ち上り、虹、まさしく五色の雲がたなびくのですが、上醍醐は遠くからも見ても山の稜線が平になっている場所なのでまさに修行の場所、信仰を広める場所として良いところだと思われたのではないかと思います。霊地としてはやはり良いお水がことも含め、条件が非常に揃っている場所がこの地なのだと思います。修行面、それから信仰面、また京都からもそこまで遠くない修行のお寺としたいという、色々な要素を兼ね備える場所がこの地だったのではないかと想像しております。

平沼：伽藍配置はどこからつくられているのですか。

仲田：上醍醐に今も醍醐水というお水が湧き出ています。はじめは上醍醐を中心として、醍醐天皇が勅願地にしてから、やはり京都に近いほうが良いのかその後、醍醐天皇のお子様たちが下伽藍を整えられ五重塔が建立された、951年前後に下伽藍が建って全体が整えられ

たとい記録が残っています。

平沼：素晴らしいですね。よくその時代に建立できたなと思いました。

仲田：今はもうあまり建物は残っていませんが、上醍醐からは実は大阪の海の方が見えるという環境ですので、密教の世界観からいうと非常に望ましい場所ではあったと思います。また、桜が綺麗なのは水が良いからだということも桜守さんが言っています。それから比較的、岩盤が固い。お寺はそういうところに建っており、だからこそ 1100 年残っているのだと思います。

腰原：密教は見られないように、奥まったところにできているイメージでしたが上醍醐へ行くと、先ほど言われたように、すごく開けていますよね。

仲田：密教の教えには二面性があります。密教は秘密の教えと書きますが、これはあくまでも師匠から弟子に対して、その自分の持っている教えを 1 対 1 で教えるということで、秘密にするということではなく、「密に教える」ということなのです。一番誤解を招くのが英訳で「Secret Buddhism」というものですがそれは間違いです。器の水を 1 つもこぼすことなく、次の器に移すという教えが密教の基本であり、口伝、書くのではなく口から口へと伝えることが基本になっています。密教の中に真言宗がありますが、言葉をとても大切にしている、言葉、音で伝えることを非常に大切にします。音を大切にすることだけではなく、五感や色彩なども非常に大切にしていますので密教寺院ってすごく派手なのです。

腰原：派手と言いますか、細かいというわけではないのでしょうか？

仲田：もちろん細かく 1 つ 1 つ密に伝えなければならないのですが、見た目の印象も非常に強く持たせることが真言宗、空海上人の教えの特徴です。この世に生きているということをとっても大切にしなければいけないと、その表れとして、人の心を引き五感で受け止めるという側面があります。醍醐寺もそうですが、元々朱塗りで中は極彩色豊かに、非常に派手な夢の空間づくりをしているのが密教なのであり、心というのを一番上において、全てを統括しているということが密教の基本的な教えに繋がります。

藤本：初めて来たとき、単純に抽象的な心ではなくて身体全体と環境とが混然一体となって、周りの環境との関わりを濃い状態で体験させられたような、すごく強烈な印象を持ちました。



仲田順英
(醍醐寺執行統括本部長)



三好祥徳
(醍醐寺執行法務部長)



平沼孝啓
(建築家 | 平沼孝啓建築研究所主宰)

仲田：体で体感するということを聖宝様はすごく大切にしていってしまっていました。上醍醐で顕教の哲学的な勉強をしておられたのですが、利便性を考えれば下醍醐につくった方がいいものをあえて山の上に顕教の道場をつくったことが、醍醐寺の重要なポイントだなと思います。人と人が真剣に向き合うことを、修験道の中に求められたのです。まさに藤本さんが仰った通りです。

櫻井：実はこの建築学生ワークショップに、最初は邪心と言いますか、会社の知名度を上げてリクルート活動に繋げようとかそんなことも考えて参加していたのですが、3-4 年目くらいからだんだん邪心が消えてきて、建築は人の命を預かるものですから、これから社会に出る人たちが間違えたことをしないように、人間性に良い影響が残る体験をさせてあげたいと思うようになりました。今は聖地の持っている力や自然の有難味を感じて、この業界を担う良い人材が育ってくれたら良いなと願って参加しています。

仲田：空海の教えに、まさに人の営みすべてが修行である、というのがございまして、出家をして修行してお経を唱えてということもそうですが、日々生きていくことが一番大切な修行だと仰っています。そこには俗っぽいこともありますが一一つを自分の中で浄化していくために仏の道があります。今は、仰る通り、どうやって次の世代に繋げるのかということ、歴史や伝統のある空間に身を置いて感じていただきたいと思っています。学生さんにはどんどん挑戦していただきたい。挑戦がないと次へ繋がれないですし、歴史や伝統の中にヒントがきっとあります。我々は先人への感謝の気持ちを持って次の世代へ繋ぐために存在しているのだと思います。その意味でこういう活動を行うことはすごく意義があると思います。逆にお寺や神社側が気付くことがあると思います。一般の方々や学生さんから学ぶことが本来、お寺や神社はたくさんないといけません。そこに気づけるかが修行だと思つので、今回はぜひ醍醐寺で修行している僧侶が、学生さんや皆さん方から何か学ぶ機会になれば良いなと思っております。

腰原：このワークショップのもう一つ重要な目的として、やはり建物というのはつくって終わりではなく、繕いながら維持続けることが大事であることを伝えたいと思っています。今、建物が消耗品につくられてしまっており、学生たちもあまり意識をすることがありません。代表として法隆寺のような伝統木造建築は、何もしないで 1000 何年も存在している訳ではありません。実際に保存や修復を続けている人の生の声を学生たちに聞いて貰って、自分達がこれからつくるものについてどう考えるのか、あるいは今ある建物をどうしていくのが良いかを考えて貰いたいというのがもう 1 つのテーマでもありま

す。醍醐寺では建物や災害も含めた自然との闘い方や共存について、宗教はどのような立ち位置を取られているのでしょうか。

仲田：この地を選んだということには、自然環境が色々な意味で整っている場所であり災害が少ないということも1つあったと思います。宗教というのは本来自然との闘いと調和だと思うんです。宗教というものが非常に大きな役割を果たして来たのは、人の歴史の中で技術が生まれたり、文化が生まれたり、伝統が生まれたりという人の営みを支えてきたこと。ですので元々の考え方があり、混ざり合って、新しいものが生まれてきて、それを大きく受け止められる受け皿でないとお寺はいけないのではないかと考えています。五重塔は何年かに一度解体修理、一回壊してもう一回作っています。それはやはり技術を継承していくためです。いろんな人の思いや技術をしっかり受け止め、次に繋げられる大きな器であることを、ずっと醍醐寺は大切にしてきたのかなと思います。損得ということではなくて、何か役に立って、その中からいろんな新しいものが生まれてくるのが大切なのではないかと考えています。

腰原：守ろうとしている人たちは、守るということを頑固に変えないことだと思っている人が多いんです。

仲田：一代二代先くらいへ引き継いでいるものを守ることももちろん大切なのですが、もう少し広い範囲で前後のことも考えないと、本当は守れないと思います。一代二代くらいのことを守ろうと思うと、すごく保守的になると思います。今の若い人たちはびっくりするほどすごく保守的ですよ。

腰原：そうですね。自分が簡単に理解できる狭い範囲で考えてしまっているようです。

平沼：醍醐寺の五重塔はスカイツリーのモデルにもなっています。日本で一番美しいタワーと言われているこの塔がつくられた所縁について、また当時の建築の設置基準などについてお聞かせください。

仲田：ある程度ルールがあったと思います。もちろん天皇のお寺でしたので、国家規模でやっていた事業ではあると思うのですが・・・

平沼：太平洋戦争とか空襲、落雷も含めて焼失したことはないのですか？

仲田：1,100年経ちますが全く焼失していません。京都の町から



腰原幹雄 (構造家 | 東京大学生産技術研究所教授) 藤本壮介 (建築家 | 藤本壮介建築設計事務所主宰)

離れていたことも幸運だったかもしれませんし、やはり不思議な空間ではあります。相輪が大きく本当にバランスがすごいです。下から見上げた美しさがまさに計算されているもので、京都で一番古い木造建築です。日本では古さ3番目、高さ3番目らしいです。でも美しさはナンバーワン。

腰原：今、新築で五重塔をつくろうとなると、必ず最初のモデルはここからなんです。この五重塔をどこから見るのが一番良いですか。

仲田：金堂の回廊から見ると五重塔が結構好きですね。不思議なことに真っ直ぐな五重塔が見えるんです。どっしりした感じの五重塔、重厚感が感じられます。さすが、900、1,000年持っている建物なのだと感じることができます。昔の人の知恵で、周りの木を植える際、昔の木は五重塔へ向かって倒れないように根などをいろいろ考えて建物を傷つけないように木を植えているようです。

腰原：今回森を復活させようということについて、この山との関係などお考えになられているのでしょうか？

仲田：少し前までは、お寺として文化財を守ろうということばかり考えていたんです。けれどももう少し広く森を守ろうというように最近考え方を変えました。森をもっと潤滑して元気にすること。もちろん伐採もしなければならぬし、間伐材の問題、木を育ててそれを使って建物を建てることなども考えて、やはり文化財を守ろうという教えよりも、もっと大きい視点で醍醐寺を守っていくということなんです。

腰原：この山の木で建物をつくろうと思うと、山にある太さにあった建物をつくろうという違う発想になります。未成熟な山からは小さい建物しかできない。または小さい部材しか出ないけど、知恵を使って大きい建物をつくろうということなんです。逆に成熟しすぎた山から太い木が出てくるので、太いま使うはずがそれが崩れてしまっていて、太い木が出てきてもこれぐらいの建物をつくるためには太い木では扱いきいので、わざと割って細かくして使おうという矛盾があったりするので。建築に都合の良い木だけが使われるようになってしまっています。森を守るためには、その森にどういふ木があって、その木を使ってお堂をつくるんだという逆の発想もあって良いのかなと思うし、昔はそうだったのではないかなと思います。

仲田：昔は遠くから運んで来ることができないために、次の建て替えのために森を育てて守るという意識もあったのではないかなと思います。森林の専門の先生によると、醍醐寺の醍醐の森はお寺があった



井垣貴子 (一般社団法人醍醐寺未来創造機構理事) 櫻井正幸 (旭ビルウォール 代表取締役社長)

ため、結構良く守られているそうです。森を元気にすることから文化財を守るというところへ結びつくの良いなと思っています。

藤本：森の話はすごく面白いなと思います。文化財単体ではなくてその周りの環境も含めて全体で考えていく。お互い依存しあって支え合うみたいな感じだと思うんです。森はそもそもそうですし、森と建物もそんな関係かなと思っています。先ほどの自然と共生するという話も言ってみれば自然がある程度建物にダメージを与えて、それを人間が直して、また自然にさらす。の中で直したり技術を継いでいく営みが起こってくるわけですね。共存するというのは実はお互い少しずつ欠落しているものが、結構複雑に支え合いながら全体がきちんと保たれているみたいなことかなと思います。今の社会ってそれを許さないところがあると思うんです。少し欠落しているとダメだと。それぞれ独立して自立させようとするのですが、逆にそうすることで共存することの難しさが出てきてしまって、これがなかなか難しい問題だなと思っています。実は発想を逆にしてそれぞれ少しどこか抜けている方が良いのかもしれない。そうすると逆に支えあって、抜けているところを補うことで、全部がうまくいく。この五重塔はそれ自体はすごく綺麗なんですが、先ほどの話で、これつこうという発想自体が過激すぎて逆にある種の欠落になっているわけですね。どうやって支えるのか。斬新な発想というのも斬新すぎてその瞬間は常識からずれている状態なんですが、逆にそれをどう支えようかという、そういう発想が生まれてくるので、次の時代の共依存みたいなものを生み出していく。そのサイクルなのではないかと思いました。ですからその発想で小さな建築でもそうですし、それから社会の在り方とかコミュニケーションの在り方がそうなっていった方が幸せな気がするし、より持続していくような感じがします。万博のテーマに繋げると、命というのは結局はそうで、単独では絶対に存在できなくて、何らかの形で支えあったり依存したりしながら、全体でうまくいくようになっています。この醍醐寺の成り立ちは、まさに今過激に次の一手を打つことや、人と人との関係などが全部これからの社会像みたいものすごく大きなヒントになっていくのではないかという気がしました。

平沼：醍醐桜、太閤桜について、秀吉が愛した桜についての所縁をお聞かせいただけたらと思います。

仲田：醍醐寺に伝わっている古文書などから見ていくと、秀吉公はすごく人を愛する方で、意義といったものをとても厚く思っていたようです。基本的に戦嫌いだったのではないかなと思います。秀吉公の周りにいた方は、みんなもともと貧しかったため、そういう人



三宝院

たちに良い暮らしをしてもらいたい、すごく喜んでもらいたかったのだと思います。もともと醍醐寺は、花の醍醐と言われていたのですが、水が良く、桜も綺麗なのでしょう。秀吉公が太閤になれたのは、当時の関白であった二条昭実から譲ってもらったという経緯があり、当時の醍醐寺の座主「義演准后」は、昭実公の弟さまであり、二条家に対する恩をすごく感じてたのではないのでしょうか。応仁の乱で焼けてしまい、二条家が座主を務めるお寺を復興したいと思ったのではないかと考えられます。花見もしたいけれど復興もしたいということで、今ある金堂は今の和歌山県の湯浅から持ってきています。三宝院の御殿やお庭はお寺っぽくありませんが、それはやはりこの場所に来て頂きいろんな方に楽しんでもらうということなのだと思います。まさしく見せるためですね。シンボルトワーとして五重塔があったからこそ、金堂を持って来ようと思ひ、五重塔を山の上から見下ろして綺麗な花見をしたいと思って山の中腹にお茶屋をつかった。そういう意味でも五重塔が残っていたというのはすごく大きかったのかなと思います。その思いは実子の秀頼公が継いでいて、秀吉公がどういう思いだったのかということも、よく分かっていたのだと思います。花見が終わった後も復興をずっと秀頼公は続けて下さっています。実は醍醐寺には秀頼と書いてあるものも多いです。西大門（仁王門）やいろいろなお道具もほとんど秀頼公によるものですし、上醍醐の復興を完成させたのも秀頼公です。桜はやはりその1つの象徴ですが、下から見た花見ではなく、上から見た花見でしたので、五重塔を中心に伽藍がどういう風に見えていたのかなと思うと、復活したら見てみたいと思います。今ならドローンを飛ばしたら見られるかもしれません。

腰原：このワークショップではものをつくる時に、テーマとして外から持ち込まないで、中にあるものでもものをつくりましょうというのもう一つのテーマなんですが、山の木以外で自然材料で醍醐寺で使われているものというのは何かありますか？

仲田：岩がありますが固いです。竹は、筍とか、京都でもこの辺りでは有名で、名産だったのですが、台風で根こそぎ持ってかれたんです。今はちょうど竹林がなくなってしまっています。

櫻井：今 SDGs だ、地球何とかだと言われていますが、環境保全するには信念がなければダメだし、信念を持つには先ほどおっしゃっていた信仰や感謝が無ければダメだということを学生に伝えていただけると、きっとここにある自然や、空気そのものへの感謝から本質に気付くのだと思うのです。人をつくるという観点から、視点を変えるところということが起きる、変わるとこんなことが起こるということをして是非熱く語って頂けたらありがたいと思います。人工知能などが出て来て、今の子供達は疎外感も感じているでしょうから、人間というのは本来クリエイティブな能力に加えて信仰心があるので、ワークショップを通してコンセプトの良し悪しだけではなく、その中にある信念が何だったのかということまでフォーカスしていけると面白いと思っています。

(令和3年11月23日 醍醐寺 三宝院にて)

—— 大変貴重なお話をいただき、本日はどうもありがとうございました。将来、この場所で開催した意義に継いでいくような、提案作品を募りたいと思います。

杉田美咲 (AAF | 建築学生ワークショップ 2024 運営責任者)